

はしがき

私は、ここ四半世紀の間、近世から近代を生きた庶民が何を主な食材にして暮らしていたかに関心を持ち、諸資料を探して読み、私なりに理解したことを、『近世庶民の日常食—百姓は米を食べられなかったか—』（海青社）と『地産地消の歴史地理』（古今書院）に記述してきました。

上記の作業は、私が40年余りおこなってきた、近世農書類が記述する農耕技術をモノサシにして、その舞台になった地域の性格を明らかにする作業と、限りなく循環する因果関係で繋がります。農作物の大半は庶民の主食材として消費され、消化されずに人の体から排出される糞尿は農作物を育てる肥料に使われていたからです。

古希の峠を越えた今、歩んで来た道を振り返り、近代を生きた庶民の農産物消費の実状を明らかにする作業の成果を、多くの読者にわかりやすい文言で読んでいただけることを目指して、この本を編修しました。

庶民の日常食材を記述する時代を近代にしたのは、読者に納得していただける資料は近代に入ってから編纂されているからです。その資料が1880（明治13）年頃の状況を記載する「人民常食種類比例」と1877・78（明治10・11）年の『全国農産表』です。

この本では、「人民常食種類比例」と『全国農産表』が記載する、近代を生きた庶民が「地産地消」していた米や麦などの日常食材の構成比をモノサシに使い、地域が固有に持つ性格を私なりに理解

できたと考える13の領域について、4つの類型にまとめた章立て方式で記述します。また、町衆(都市に住んでいた人々)の日常食についても、少し記述することにします。

なお、庶民とは名もない普通の人々を意味する用語ですが、この本で記述する庶民は、近代初期まで日本の総人口のほぼ8割を占めていた農民を意味する呼称として使います。

目次

はしがき

目次

第1章 庶民の日常食材の構成比を尺度にする地域類型の設定	1
第2章 米の割合がかなり大きい国	
(1) 羽前国と羽後国	10
(2) 出雲国	19
(3) 近江国と伊賀国	22
第3章 米の割合が大きい国	
(1) 越後国	30
(2) 信濃国	36
第4章 甘藷の割合が大きい領域	
(1) 甘藷の長所と短所	41
(2) 沖縄島	46
(3) 薩摩藩領	48
(4) 大村藩領	50
第5章 不可解な構成比の国	
(1) 讃岐国	55
(2) 尾張国	62
(3) 三河国	68
第6章 町衆の主食材は米だった	
(1) なぜ裏長屋というか	75
(2) 裏長屋の間取り	75
(3) キン坊一家の日常食	76
(4) なぜ米だけを炊いたオマンマか	77
(5) 生活用水は水道水だった	78
(6) 排泄物は商品だった	78
あとがき	80
さくいん	81

第1章

庶民の日常食材の構成比を尺度にする 地域類型の設定

筆者が住んでいる愛知県豊橋市は、近世までの国名では、三河国に属していた。1879～80（明治12～13）年に、内務省勸農局は庶民が1年間に食べた食材の種類と構成比の調査を道府県に指示し、道府県は聞きとり調査で得たデータを国ごとに集計して勸農局へ報告した。そのデータが1881（明治14）年に農商務省農務局が刊行した『第二次農務統計表』に記載されている「人民常食種類比例」であり、近代日本庶民の日常食材の種類と割合がわかる最初の資料である。

「人民常食種類比例」は国ごとに各食材の構成比を棒グラフで表示しているが、全国食糧振興会が刊行した『日本の食文化』は、国ごとに各食材の合計値を100として、各食材の構成比を表示した帯グラフを掲載している（図1）。なお、この図右端の構成比の全国平均帯グラフは、筆者が作成した。

「人民常食種類比例」が記載する庶民の国別食材構成比は妥当か。内務省勸農局が刊行した1877・78（明治10・11）年の農産物の生産量を記載する『全国農産表』の数値と対比すると、両者の数値に大きい違いはないので、筆者は「人民常食種類比例」は信用できる資料であると解釈している。

「人民常食種類比例」が記載する全78国の食材の構成は多様である。筆者がこれまでに庶民の日常食材を指標にして地域の性格